

特集「AIとデータ活用が拓く新たな社会価値創造」の 発行に寄せて

馬 場 定 行

急速に進化するAIは、企業活動や社会生活のさまざまな領域へと広がりつつある。生成AIの登場によって、AIは一部の専門家だけが扱う技術から、多くの企業や組織が日常的に利用できる技術へと変わった。しかし今、求められているのはAIを使うことそのものではない。AIをどのように業務やサービスの中に組み込み、新たな価値へと結びつけていくかが問われている。AIの価値は、技術そのものを導入するだけで生まれるものではない。現場に存在する課題を起点に、業務の中で蓄積されるデータ、専門的な知見、そして人の判断を結びつけることで、初めて価値が生まれる。そして、その価値を高め、顧客に届け、さらには社会課題の解決へと広げていくことが、これからのAI活用に求められている。

私たちは、AI活用を単なる技術導入ではなく、現場の課題を起点として価値を創出し、社会へ実装していく継続的な取り組みとして捉えている。

本特集では、2号に渡り、「AIとデータ活用が拓く新たな社会価値創造」をテーマに掲げ、AIを価値へ変えていくための多様な実践を紹介する。また、その過程を理解するための一つの見取り図として、「AIを理解し活用する」「AIをデータとつなぐ」「AIで業務を変える」「AIで価値を創る」「AIを社会へ広げる」という五つの視点を設定した。

本号に収録した論文は、これらの視点を具体的な現場の取り組みとして示すものである。AIを業務やデータと結び付け、新たな活用の可能性を探る取り組みとして、生成AIと業務ソリューションの連携やデータネットワーキングに関する研究を紹介する。これらは、AIを単独で利用するのではなく、業務データや知識資産と結び付けることで、新たな価値創出へつなげようとする実践である。

また、AIの活用領域が広がるほど、安全に利用し続けるための基盤も重要になる。ローカルLLMに関する論考では、機密情報の取扱い、データ主権、運用ガバナンスといった課題を取り上げている。AIを顧客価値や社会価値へ結び付けていくためには、技術の性能だけでなく、信頼性、セキュリティ、ガバナンス、継続的な運用を含めた実装の視点が欠かせない。

さらに、本号では、製造業における予兆検知、農業経営支援、教育分野における学習支援、エネルギー分野における需要予測など、多様な領域での実践を取り上げている。これらは、AIを活用して現場課題の解決に取り組むだけでなく、新たな顧客価値や社会的価値の創出へとつなげようとする試みである。AIとデータの活用が、個別業務の改善から社会全体の価値創造へと発展し得ることを示している。

次号では、AIをより日常の業務へ組み込み、持続的な価値として定着させるための実践を取り上げる予定である。そこでは、人とAIがどのように協働するかに加え、信頼性と安全性の確保、再現可能な仕組みとしての実装、効果の評価と継続的な改善が重要な論点となる。本号と併せて、AIを価値へ変えていく取り組みの広がりや深まりを感じていただきたい。

本特集で取り上げるテーマや技術は多岐にわたる。しかし、それらに共通しているのは、AIを単なる最新技術として取り扱うのではなく、現場の課題解決や価値創造の仕組みの中に位置づけている点である。AIを価値へ変えるには、技術だけではなく、データ、業務、人材、ガバナンスといった要素を一体でとらえる必要がある。そのため、2号に渡る多様な実践を通じて、そのための知見を共有することを目指している。

BIPROGY グループは、「先見性と洞察力で技術の可能性を見出し、社会課題を解決する」ことを掲げている。AIもまた、導入すること自体が目的ではない。重要なのは、その可能性を見極め、現場の課題、顧客の期待、社会の要請と結びつけ、持続的な価値として実装していくことである。本特集を通じて紹介する各論文は、そのための実装知を、それぞれの領域から示すものである。

本特集が、読者の皆さまと共に、AIとデータをどのように価値へ変え、顧客と社会へ届けていくかを考える契機となれば幸いである。

(執行役員／CTO)